

## 7. 人 格 1

## 201 青年の欲求体制水準について：駒崎勉（富士短期大学）

青年の欲求を高次欲求（社会的承認，独立，愛情，優越等12項目）と低次欲求（食物，自由行動，異性交遊，娯楽等8項目）とに分けて一対比較させ，彼等の欲求の強さ，ありかた等を検証した。中学3年では男女とも高次，低次欲求の比率に性差なく，大学1，2年は男は中3よりもほぼ有意に低次が減少し，女は著しく低次が強い。低次の増大は未発達や不適応を示すものとすればこれは問題であろう。また女子大生は低次が強いとはいえSDが著しく大で，極端に道徳的か，だらしない者が多いことを暗示している。また全体的に低次欲求のうち“自由に行動し遊べる”，“小遣に不自由しない”が圧倒的に多く選択され，現代青年の気質がうかがわれる。

## 202 高校生のもつ理想的人間像：山根薫（埼玉大学）

青年期にある男女高校生たちが，自己のまわりをとりまく人々との接触によって，どのような人間観をもってくるか。かれらの望む人間像を友人，教師，両親の中にどのように反映させているか。その現実の姿にどのような批判を下しているか。それらを明らかにすることによって，青年の理想の一端をうかがい知ろうとする。質問紙によってかれらの答を求め，性別，共学か否かによるちがいがいなどによって，そこになんらかの差を生ずるか，対象によって異なる結果が出るかなどを明らかにしようとする。

## 203 自己概念内葛藤に示される Personality 特性について：岡部弥太郎・〇古沢厚子（国際基督教大学）

個人の行動は，その個人が自分自身をどのようにみているかによって内部的に規制される。ここでは意識的にひとつの概念形態としてとらえられた自己についての知覚をとりあげ，いろいろなレベルでの自己概念の全体的配置が個人をどのように特徴づけているかみようとす。仮説として，現実の自己と理想の自己との間のずれと，現実の自己と人はそうみていると思っている自己との間のずれとは個人の行動にちがった働きをしているのではないかとし，これについて inventory 形式の質問紙を用い大学生124名を対象に検討した。結果はこの仮説を支持し，個人の適応を自己概念の面からみるときには，こうした全体的配置のちがいを考慮すべきものと考えられた。

## 204 自己認識の構造分析：津留宏（神戸大学）

自己認識は自己の深層面ほど客観的，恒常的な認識が困難になる，との仮説のもとに，K. Lewin が述べた Personality 構造四領域（知覚—運動，周辺，深層，中心自我）に応じた質問を各領域10問ずつ作り，これを三分法（はい，いいえ，わからない）で自己評定させたものと，種々の条件を変えた場合の他人評定とを比べ，その間の評定のずれの量，方向，広がり等から自己認識の構造を分析，考察する。

## 205 食事習慣をめぐる幼児期の親子関係（I）：成田錠一（名古屋市立保育短期大学）

幼児期（対象5～6才）における親子関係の焦点場面—親子相互からの—として食事場面をアンケート調査により，次の三つの次元よりとらえ，そこに発現する親子関係をいくつかのパターンとしてとらえられるかどうかを分析しようとする。アンケートの次元は，1，食事の時間的，空間的，物質的問題，2，食事の習慣，くせ，3，親の態度（しつけについて）の三つに分けた。更にこの問題に影響すると考えられる二三の要因（性，年齢，同胞の位置，地域等）との関係についても考察を進めるが，今回は集計の都合からその一部を発表する。

## 206 過保護と社会成熟度：斎藤幸一郎（慶応義塾大学）

家庭の文化的経済的背景において比較的高いレベルに属する一幼稚園の園児115名に対し，個別的に，18項目からなる社会性成熟度に関する検査法を実施した。同時に，家庭における教育態度が過保護であるかそれとも放

## 研 究 発 表 要 旨

任であるか、またどの程度にそうであるかを測定するために、放任的または厳格的な態度を示すような15項目と、保護的または盲愛的な態度を示すような15項目、計30項目のそれぞれを評価せしめるような質問紙を作成し、上記園児の両親から回答を求めた。

今回は、上記二つの測定結果の間の相関の程度を中心としてまとめた。

## 207 団地幼児の社会性の発達：岩城富美子（西南大学）

Ⅰ 課題：近代的住宅形態の団地で成長する幼児の示めす人格形成の特性，就中社会的行動の発達を，団地人特有の社会意識及び育児態度との関連において追求した（九州地方ユネスコ依頼研究の一部）。

Ⅱ 方法：(1)質問紙—育児調査，社会的成熟度検査 (2) 面接—団地世帯主及主婦を対象としてインタビュー（調査者教育社会学専攻者五名）(3) 観察—園内自由遊び場面で，時間抽出法により幼児の行動観察。一名につき廿分。観察者心理学専攻者一名及び訓練を受けた共同者四名。

Ⅲ 被験者：実験群福岡市貝塚団地及同幼稚園，対照群同地域普通住宅及幼稚園。

## 208 創造性に関する研究—創造性と教育—：恩田彰（東洋大学）

創造性の研究は，人格研究にとって重要である。また創造性は，教育における重要な目標でもある。創造的な人間は，現代の社会において，強く要求されている。創造性を養うということは，何もその目的が，特別に天才や秀才の養成や，また芸術家や発明家や科学者をつくるために行うことに限らない。ごく平凡な当り前のこととして行うのである。というのは，創造性は誰でも持っている人格の一特性であるからである。これは一朝にしてできるものではなく，家庭教育や学校教育の中で，幼い時から養われてゆくべきものである。次に創造性の教育は，いかにすべきかを検討することも大切である。以上の問題について考察してみたい。

## 209 道徳的問題場面に対する態度の発達の考察：大平勝馬・〇寺井亮三（金沢大学）

道徳的態度を養う上に必要な基礎資料を得ようとして，その測定および発達の考察を試みた。

道徳的問題場面における態度調査問題50題を作成し，Likert 尺度法により回答させた。被験者は金沢市内小6，中2，高1計350名。(1)全般的に小6で社会的に望ましいとされる態度をとる者が多く，中2，高1では望ましくない態度や不明とする者が多い。(2)男女とも中2を中心として変化がみられる。(3)五類型別にみると友情では差がなく，忠誠・責任・正直では小6のみ，道徳的勇気では小6—中2—高1の間に差がみられる。(4)学校生活面における発達の差は大きく，家庭・個人的場面の発達の差は小さい。

## 210 学業成績と性格との関係について：返田健（近畿大学附属教育研究所）

知能指数は個人の学習の能力を測定し，予測しようとするものであると一般には考えられている。この考えには異論があるとしても知能指数と学業成績との間にはかなりの相関があることは事実であろう。しかし，知能指数に比べ学業成績の優れているもの，反対に知能指数から期待されるほどの学業成績の得られないものも相当ある。これに対する原因は，種々考えられるだろうが，この研究では，この学力と知能指数の不一致の原因の主要なものが，その個人の性格にあるのではないかと考え，これらのものを性格テストで捉えてみようとした。すなわち，両者のグループの間の著しい相違を追求しようとした。